

出会いの場としての図書館 —テレビドラマに描かれた図書館と図書館員の実像—

仙台 睦

1979年から放送された『阿修羅のごとく』が大きな反響を呼んだのを始め、公共の図書館や図書館員が登場するテレビドラマが数多く作られてきた。その中には『ビューティフルライフ』や『いま、会いにいきます』など、社会現象となったものもある。先行研究では、こうしたテレビドラマに登場する公共図書館や図書館員は、現実とかけ離れたものであったりステレオタイプなイメージで描かれていたりするとされている。そこで、本研究では、1970年代末から2016年までのテレビドラマ10シリーズ103本を実際に視聴して、ドラマに登場する図書館員の男女比、外見、性格（読書好きかどうか）、業務内容、図書館設備の描かれ方や変遷、図書館シーンの出現頻度や物語展開の上での出現位置（始めのほうか終わりのほうか）などを調査した。

調査の結果、テレビドラマに描かれた公共図書館や図書館員は、男女比や設備、業務内容の点で、必ずしも現実とかけ離れていないことがわかった。描かれている女性の比率は、全10シリーズの平均が63%であり必ずしも図書館は女性ばかりの職場としては描かれていない。2015年のドラマ『偽装の夫婦』では71%と同年の現実の女性比率75.8%に近似している。設備や業務内容では、現実のコンピュータ導入や読み聞かせの普及と並行または遅行して、ドラマにもそれらが登場するシーンが出現している。

先行研究では、テレビドラマでのステレオタイプな描かれ方の例として、(1)図書館員はヒマな職業である、(2)図書館員が専門的な仕事をしていない、(3)図書館員は読書好きという3点が挙げられていた。調査したドラマでは、(1)図書館員は「貸出・返却」や「排架・書架整理」など多くの業務をこなしており「ヒマ」ではない、(ただし、勤務時間中にも私的な会話をする場面が全てのドラマで描かれている) (2)読み聞かせやレファレンスなどは描かれているが、選書は描かれないという点で専門的な仕事の描かれ方には差異がある、(3)図書館員が本好きであることを窺わせる場面がないドラマが10シリーズのうち4シリーズである、といった点で、先行研究が定義したステレオタイプな描かれ方ばかりでないことがわかった。

図書館シーンの出現頻度や出現位置では、どのシリーズにおいてもストーリーの前半部分に図書館シーンが多く出現していた。そして、そこでは、登場人物たちの出会いが描かれていた。テレビドラマの物語展開において図書館は他者(6シリーズで現在または未来の恋人)との「出会いの場」としての機能を果たすものとして位置づけられており、公共図書館の多くは、誰でも事前の約束無しに訪ねることのできる場所であることが、こうしたテレビドラマの物語展開における図書館の位置づけにつながっていると考えられる。

(指導教員 辻泰明)